県指定無形民俗文化財

川内大綱引

9月21日開催！

川内大綱引は、慶長年間（1596～1614年）に始まったとされ、一説には関ヶ原の合戦の際、第17代島津義弘が兵士の士気を高めるために始めたといわれています。大綱引は人々の心に深く根付き、400年以上の歴史と伝統を守りながら、中秋の名物として受け継がれてきました。

当日、朝から半日かけて約1500人の人々が365本の縄を練り上げる大綱は、長さ365m、重さ7tに及びます。本番では、約3000人の「ハダカ」と呼ばれる上半身にサラシを巻いた男たちが、「上方」「下方」に分かれて一斉に綱を引き合います。

また、相手の引き隊を妨害するために、相手陣内に押し込んでいく「押し隊」と呼ばれる男たちの体と体が激しくぶつかり合う姿は、見る者を圧倒します。

それぞれの役割

一般的な綱引とは異なり、独特なルールで行われます。ダン木を中心に川内川方向を下として上方（赤）、下方（白）に分かれ、それぞれ4つの部隊で構成されます。

大将

大将は全部隊の総指揮、作戦の立案など全体を総括する重要な役割です。

押大将

押大将は、「押し隊」と呼ばれる部隊に指示を出す役です。綱割りの前から相手陣営を牽制し、先陣を切って敵陣に突撃します。

一番太鼓

一番太鼓は、太鼓を叩いて引き手たちに指示する役です。大綱の最後尾まで指示が伝わるよう、配置されている「太鼓隊」を率います。

押し隊

相手の陣地に突進してぶつかり合い、敵の引き隊の体勢を崩します。この押し隊同士のぶつかり合いは、川内大綱引の見どころの一つです。

引き隊

綱を引く部隊です。太鼓隊の合図に合わせ、大綱にくくりつけた「引き綱」を一斉に引きます。

太鼓隊

一番太鼓から十番太鼓まで、一列に並んで一番から順に太鼓を打ち鳴らします。引き隊はこの太鼓の合図に合わせて綱を引くため、攻撃を指揮する重要な役割です。

ワサ係・ワサ払い

綱が相手から引かれ形勢不利となった際に、それ以上綱を引かれないように綱の最後尾にある「ワサ」を中央の「ダン木」にかけます。

＊危険ですので、ワサには近づかないでください。

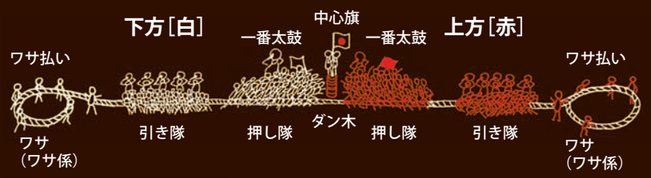
憧れの三役

大将・押大将・一番太鼓は「三役」と呼ばれ、部隊を統括する名誉ある役とされています。

【問合先】＝▼川内大綱引保存会 ☎(21)1851
▼本庁観光・シティセールス課観光おもてなしグループ ☎(23)5111（内線4382）

川内大綱引の態勢図

①綱割り（勝負開始）…勝負はまず太鼓合戦で始まり、引き合戦と押し合戦が繰り広げられます。
押し勝った方が相手の引き隊を払いのけ、綱を引きます。



【ワサかけ】
綱を引かれた方はワサをダン木にかけるために綱を持って走り、ワサかけをします。

負けている方は体勢を整え、押し隊を繰り出し、綱を引き戻します。

②終了・勝敗…
一定時間経過すると綱にノコを入れ、綱を切って終了となります。勝敗は綱の中心が付いている方が勝利となります。

＊日程などの詳細は、19ページを参照ください。

誰もが暮らしやすいまちづくりを目指して

認知症に対する取り組み

【問合先】＝▼本庁高齢・介護福祉課介護給付グループ ☎(23)5111（内線2676・2677）
▼薩摩川内市地域包括支援センター ☎(24)3331

高齢化の進展に伴い、全国的に認知症の方が増えています。厚生労働省は、全国で認知症を患う人の数が、2025年には700万人を超えるとの推計値を発表しており、65歳以上の高齢者のうち、5人に1人が認知症になる可能性があるとしています。

認知症とは？

いろいろな要因で脳の細胞が死滅したり、働きが悪くなったりしたために、さまざまな障害が起こり、生活する上で支障が生じる状態をいいます。

認知症の症状は？

直前に起こったことも思い出せなくなる「記憶障害」、筋道を立てた思考ができなくなる「判断力の低下」、時間や場所など、自分が置かれている状況を正しく理解できなくなる「見当識障害」などがあります。また、これらの症状に加えて、本人の性格や環境の変化などが加わって起こる症状（妄想・幻覚・徘徊（はいかい）など）もあります。

軽度認知障害（MCI）とは？

認知機能（記憶、行動など）に問題が生じているものの、日常生活には支障がない状態です。しかし、放置すると、5年間で約50％の方が認知症に進行するといわれています。「MCI＝認知症」ではないので、この段階で早期発見し、予防対策を行うことで、症状の進行を遅らせることができます。

認知症を予防するには？

次の3つがポイントです。

①運動

運動には、脳の働きを高める効果があります。また、認知症と生活習慣病は大きく関係しており、運動により、血圧やコレステロール、血糖値などを正常に保つことができます。

②食生活

脳を働かせるエネルギーとなるのは、毎日の食事です。バランスの良い食事で脳に栄養を与え、生活習慣病を予防しましょう。

③脳への刺激

脳に刺激を与えることで、多くの血液が流れ、脳の働きを活性化することができます。特に「○○をしながら△△をする」という、頭と体を同時に使う「デュアルタスク（二重課題）」が、脳を活性化させるのに有効だといわれています。

認知症に対する本市の取り組み

本市では、認知症の方の意思を尊重し、できるだけ住み慣れた地域で、自分らしく生活することができる社会を目指しています。そこで、国が定めた計画に基づいて、次のとおりさまざまな事業を実施しています。

▽認知症サポーター養成講座

認知症への理解を深めるための普及・啓発の取り組みとして、認知症サポーター養成講座を実施しています。認知症サポーターとは、認知症を正しく理解し、認知症の方やその家族を見守る応援者です。現在、サポーターは市内に延べ1万人おり、市民全員がサポーターになることを目指しています。養成講座は費用無料で、市内どこでも開催できます。

▽認知症初期集中支援チーム

認知症の方やその家族に対し、認知症の専門医、専門知識を持つ保健師や社会福祉士などがチームとなり、支援する活動を行っています。

▽認知症相談会

認知症に関する相談窓口として、医師や認知症地域支援推進員が応対する個別相談会を各地で開催しています。

▽認知症カフェ・家族介護者交流会

認知症に関する理解や認知症の方とその家族を支える地域づくりを促進し、誰もが気軽に集い、交流できる場として開催しています。認知症カフェは市内に10箇所あります。どなたでも参加できますので、気軽にお越しください。

▽認知症ケアパス

認知症と疑われる症状が発生し、認知症が進行していくそれぞれの過程において、その人の状況に応じたサービスの流れを示したものが「認知症ケアパス」です。本市では、昨年に作成し、医療機関などに配布しています。

▽ミニデイサービス・認知症予防教室

高齢者の健康づくりの場として、介護予防教室を実施しています。

ミニデイサービスは、65歳以上を対象に、運動を中心とした認知症予防や口腔、栄養などの内容を含んだ教室です。市内の21箇所で実施しています。

認知症予防教室は、予防に特化したもので、認知機能の維持・向上に効果があるとされているプログラムを実施しています。

＊本市の取り組みに係る詳細については、問い合わせください。

認知症が気になったときの相談窓口

認知症が気になったときは、まず、かかりつけ医に相談ください。

そのほか、市役所の高齢・介護福祉課、地域包括支援センターでも相談に応じます。